

対話：ハイパー縄文文化の難点

吉田 泰幸（以下、「吉田」） スピーカーの話の後は毎回「対話」と名付けていますが、スピーカー二人だけで話すのではなくて、会場みなさんとも話を広げていきたいと思います。だいたい三つのことを話したいと考えています。

一つは、今日の発表についての質問です。全体の理解に影響を受けるような箇所であれば、解決しておいた方がいいかと思います。二つ目は今日の発表に対して、それは考えすぎではないのか、あるいはここは違うのではないのか、という Critique、批判です。三つ目は、この手の話は大きく言えば今自分たちが当たり前だと思っていること、国民国家であるとか、様々な社会システム、そういうものに対して実はこういうことですよという議論の仕方、例えばベネディクト・アンダーソンが国民国家を幻想の共同体と言ったり、フーコーが刑務所や病院は実はこういう場所ですよと指摘したり、ブルデューという学者が階級差には実は文化資本なるものも関係しているとか、その手の議論に我々の話も連なる、少なくともそれを目指したものと思いますが、こういう議論は、我々が当たり前だと思っていることに大きな問題があることはよくわかった、ところが、ではその次にどうするのかという話はなかなかしないので、大きくはその三つの話ができれば、と考えています。この順番通りに進めるわけではありませんが、口火を切ってもらうのは、私と一緒に頑張って大塚先生の論文を読んだジョン・アートルさんにお願ひしましょう。

ジョン・アートル（以下、「アートル」） 私は縄文の専門家ではないし、考古学者でもないの、なぜ土器か、という根本のところから探っていききたいなと思っています。

私は少なくとも一回は土器型式に触れたことがあります。4年前にカリフォルニア大学バークレー校の羽生淳子先生の研究室に入って調査をしていた時に、土器破片が1000個ぐらいあって、学生が分類する作業を半年かけてやっていました。面白いと思ったのは、最初に分け方を教えた時に、破片を20個ぐらい出してきて、「じゃあ分けてください」と。経験がない学生と私が、「じゃあ、土器の上の部分、中の部分、下の部分で分けようか」、そうしたら「ううん、これは意味がない」となったので、「では赤い色と黒っぽい色で分けていこう」とすると「これも意味がない」と言われて、ではまた別の分け方をしたら「それも意味がない」というやりとりを経験して、なるほどこれはとても不自然な分け方をしているな、と思いました。そこで土器は縄文前期の諸磯a、b式で、最初は諸磯aとbに分けていきましたが、aとbの中でもさらに分ける必要があった。印象的だったのは、以前に別の学生が分けたものがありました

が、それを再度分け始めた。四割ぐらいは間違っているということになり、また分けていった。土器が面白いと思ったのは、まずは専門知識がないと分けられない、マニュアルが綺麗に書いてあっても、土器自体には客観性があって、土器は変わらない、見ればその形ですが、分け方というのはとても習慣的なものだと思います。そこで根本のところから疑問が湧くのは、土器は確かに土器型式編年の表を作っていくと、納得する部分もありますが、根本となる分け方、土器をベースにしている縄文考古学はそこに疑いがあるのか、それを反省的に考えているのか、土器以外の資料で同じことをすると、データが一致するのか、そういう素朴な疑問から入りたいと思います。

吉田 今の発言の中で「習慣」とあったのは興味深いですね。ちなみに学生やジョンさんに「それは違う」と指摘していた人は羽生淳子先生ですか。

アートル 羽生先生です。

小林 正史（北陸学院大学。以下、「小林」） それは納得できたんですか。

アートル 半年分類している間に、何をどういう風に見ようとしているのかはわかってきます。それは文様の見た目だけではなくて、文様の彫り方に着目するとか。他に疑問だったのは、破片のどちらを上にするか。土器片の後ろをそっと触って、どちらが上かという議論がよくありました。結果、どんどん土器型式の見方が身につきますが、分け方のルールは一つではなく、複数のルールで分けるのが印象的だった。分け方は身につくものの、以前に分類した学生と私たちでは分け方が違うというのは、これは習慣的な行為ではないかとも思いました。いくらこれが客観的と言われても、100% 正しいということはない。代表的な土器、型式に当てはめやすい土器に対して、

* 下部にある註は吉田泰幸による

ベネディクト・アンダーソン Benedict Anderson

ナショナリズム研究の古典である“Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism”（アンダーソン、白石他訳、2007）の著者。日本の人文・社会系の研究者はアンダーソンに依拠しすぎていて、ナショナリズムがそもそも何かをあまり考えていないとの批判もある（萱野 2011）。

フーコー Michel Foucault

フランスの哲学者。代表作に『言葉と物』、『知の考古学』、『監獄の誕生』など。「刑務所や病院は実はこういう場所」というのは、パノプティコン

と呼ばれる作りの刑務所や病院、学校、工場などの近代の施設は規則を人に内面化させる装置であることをフーコーが指摘したとの理解に基づいている。

ブルデュー Pierre Bourdieu

フランスの社会学者。ここで言及した文化資本という概念のほか、ハビトゥスという概念は認知考古学にも取り入れられている。

羽生淳子先生の研究室に入って調査 調査の詳細は Fujii and Ertl eds. 2013、特に Chapter 3-III: Typology, Professional Vision, and Community Practice: Ethnology of East Asian Archaeological Laboratory を参照。

そうではないものはどうするか、という問題もあり、これはうまくカテゴリーに入らないから、放っておきましょう、となった。型式に入らないものは報告書に入れなくてもいいとしている印象もあった。

小林 その時は、容器としての使い方というのは考えなかったんですか。

アートル 多分そういう視点もある程度はあったと思いますが、私はそれほど考えてはいなかった。

小林 では文様だけ、時期決定が全てだったということですか。

アートル ……でした……と思う。そこまで詳しくありませんが、とりあえず学生にこうやって分けてと言われて、自分は観察者の立場でしたが、自分でも分類はしていた。

吉田 ジョンさんも以前に言っていたように、英語圏からの日本考古学への批判というのは三つぐらいあって、一つはナショナリズムに貢献している、二つ目はもっぱら土器編年研究をもとにした文化史研究を主にしている、三つ目がそれらを支えている埋蔵文化財行政への批判です。このセミナーではそうではないところも見たいというところから始まってもいますが、羽生先生も日本考古学の人としてアメリカの学生とジョンさんに土器の分け方を教えていくというのは面白いですね。それぐらい日本の考古学者には根付いたもの、ということも言えそうですが、羽生先生は前々回のセミナーで話をしてもらったら、大塚先生が言うところの考古ガールだったそうなので、それも影響しているかもしれません。羽生先生と共同研究者のクレア・フォーセットさんの戦後日本考古学の理解として、「脱政治化している」というものがありますが、今日の大塚先生の話は、その大元の山内清男の編年表 (Fig. 6.2.2) には、極めて政治的なメッセージが実は込められているという話だったのが非常に面白いと思いました。今の話を聞いて、大塚先生何かありますか。

大塚 達朗 (以下、「大塚」) まず土器について、私はそうやって簡単に部位別にバラして、分析はしないです。まずはくつつくかくつつかないか。つまり、小林先生がおっしゃるように深鉢か浅鉢か、まずは形をチェックしないと。

小林 私は「鍋」と言っています。

大塚 私は「鉢」と言います。形をチェックした上で、何であるかを考えないといけない。日本考古学ではカタログがあるから、それに合わせてしまう。カタログに合わ

せるというのは、思考方法から身体動作、つまり土器をこう見るんだ、ということまで真似することです。身体をその通りに動かすというのは見方を規定するから、私はそれはよくないと言っています。南山大学の学生には自分で見なさい、と言います。学生には私自身の見方は説明しないです。私の場合、土器片はどこにあたるのか、土器の口縁部・胴部・底部のどこにあたるのかを考えながら、くっつけていくことです。そのうちに表・裏を見た時に裏の状況、表の状況、調整や施文などの癖はどういう癖が出てくるかとか、形が分かれば分かるほど、腕の動きがわかる。そういう風にやっています。だから何々式というのは実はどうでもいいことです。何々式というのは人為的な分類の最たるものですから。何々式と思いつくのは日本考古学のよくないところでは。それはなぜかという、この表はイデオロギーの産物ですから、実は。山内清男的に土器を見るというのは、山内清男の価値観を共有しながら見ないといけな。しかも、共有してまで見れば山内清男の言っていることがなんか変だな、と思うはず。特に文様帯です。見えない部分に繋がりがああるという理屈です。それをなぜみなさんは気にしないのか。みなさんは合理的に、この部位とこの部位を比較する、それは正しいかもしれない。ところが、山内清男の言うことは正しくない。それなのに急に神格化していく。これが実証的研究だと思いつく。そのおかしさに気が付いた時に、土器をどう見るかという、全体を見る必要がある。

とにかく繋がるかどうか。私の一番の成果は、泉福寺洞穴の上層と下層から出てきた土器をくっつけたことです（大塚 1987）。泉福寺の土器群は個体識別していない。接合作業をしていない。先ほど言ったことは、個体識別ということです。私たちは、東大では個体識別から始めるように教わりました。だから、どんなに破片になっても勝手にピックアップするな、と。個体識別しないといけな。個体識別と厳しく言ったのは、藤本強先生です。彼は「何々式だとかいうのはバカが考えることだ」とまで言っていて、本当のプロはこれがどういう器形になっているか考えないといけな。なぜなら土器は器（うつわ）ですから。これを私は叩き込まれて、個体識別をしながら、何個体あるか、どういう形があるか、高いか、低いか、浅いか、皿形かとか、小さい壺かとか、自分なりに訓練していました。私は個人的に得意な技があって、頭の中で土器破片を回転させるのです。あるところで出たものとまた別のところで出た土器がこうくっつくな、と頭の中でわかる。寿能泥炭層という遺跡で土器を自分でくっつけていました。おばさんたちがアルバイトでやっている間は任せておいて、夜な夜な残って自分でくっつけて、おばさんたちには「お疲れ様です」といいながら、一所懸命拓本とってもらうとか色々やりました。それで、基本は形を明らかにする。一つの用途かどうかはわからないですから、どうやって形が出来上がるのか、その時

寿能泥炭層 埼玉県さいたま市寿能町（旧・大宮市寿能町）に所在する縄文時代後晩期を中心とする低湿地遺跡。豊富な土器群のほか、木胎漆器な

ど、多量の有機質資料が出土した。後出する故・新屋雅明氏のことを大塚氏は「寿能仲間」と称している（大塚 2015）。

には手の動きとかをチェックしないといけないはずですよ。なぜなら土器作りは職人技だからです。固有の技があるはず。沈線なら沈線の引き方で流儀があって、一回引いてOKな人たちと、何回も引いて一所懸命引いてまともな線のように見せかけるとか。第一様式を見ると一回で引いています、回転台にのせて。縄文土器の大洞式などは一回ではなく、なぞっています。

小林 第一様式とは何のことですか。

大塚 弥生土器の第一様式です。綺麗に線を引いているのは、そういうことです。

それから土器はものすごい数出てきます。たくさんあるものに興味を示す人間と、少しだけ出てくるものに興味を持つ人に考古学は別れるらしい。私はものすごく出てくるものの中で、土器に興味を持ったのはくっつけられるからです。くっつけると情報が多くなる。石器はくっつけることによって、結局打ち欠いたということしかわからない。「どうなんですか、石器をやってる人って」とからかうと怒られますが。結局打ち欠いてできるというそれ以上のことを議論していない。會田容弘さんなどか解説していましたが、異なる技法の石核が最終的にはくっつくことがある。ナイフ形石器で知られている遺跡です。異なる技法が一つの石の塊になることがある。そういう意味で石器の接合も大事ですが、私にとって、土器はとにかくくっつけて形をチェックするだけではなくて、その形がどうやって出来上がったか、それを思案していくことで情報を得るようにしています。

だから、「何々式を覚えなさい」というのは一番、土器が嫌いになります。「あなたはできてません」と言うと、言われた学生はがっかりしますよ。土器が面白いと思っている学生に対しては、すごく意欲を削いでしまう。だから私は何々式を覚えなさい、ではなく、とにかく、この土器はどういう形になりますか、まずはそこから言います。あとは、くっついた土器の表裏、左右で色が違ったりします。これは土器をつけた時に一番面白い。くっついた土器の左右で全く違う。よく見ると、どこからどこまで火にかかっているかわかる。使っている時と、あと、埋没してから色が変わる状況があって、色々起こっています。そういうのを一個一個見ていくべきです。だから、何々式を覚えるというのは、私も昆虫のカタログ少年だったので、それが面白いのは十分わかっていますが、何々式を覚えなさいというのは、害悪です。

吉田 今のは、冒頭に私が言った、今後どうするか、に関わることだと思います。ジョンさんが言ったように、ジョンさんと私で博物館に行って、私が適当にあの土器は何式、あれは何式と言うのは、大塚先生のいうカタログ的思考に、私も毒されているからです。ただ、大塚先生がそこまでそういう思考に批判的だと認識している人はあまりいないと思います。例えば、大塚先生が九州に土器を見に行った時に、麻雀という盲牌のように、土器の破片を触っただけで何式かわかったという伝説がまことしやか

に伝えられていますが・・・

大塚 基本的にはそのとおりです。洗っていて時間が勿体無いし、学生時代に土器を早く見たいから、洗うところから参加して、洗う時にどうやったらわかるか色々考えて、それで掴むポイントがわかってきて、時期ごとに、それで何式、何式とわかってきました。だから、それは本当です。その方が、無駄がなくていいです、夜でも土器を拾えるし。

吉田 本当のことだったらしいです。ただ小さな破片を見て何式か理解できることが素晴らしい、あるいはそうしないとダメみたいな感じになっているとも思います。日本考古学に批判的な羽生先生も、それが身についているというのは面白いですね。

アートル 彼女から一回話を聞いたのは、あれは神奈川県の高田遺跡というところの資料で、自分が子供の時に土器を拾った遺跡が発掘された時に多分、慶應大学から一回土器を預かったのですが、15年間ぐらいアメリカで何もできなかった。でもそれをやらないといけないという気になって、やはり日本の発掘調査報告書としてまとめるのであれば、まずは型式で分けなくてはいけないという事情があったみたいです。彼女がよく言っているのは、「アメリカは小さいデータから大きいことを言う、日本は大きいデータで小さいことを言う」という違いがあって、土器の整理作業のように大きいデータをとるのは、自分が今いるパークレーのポストにとってはあまり意味がないので15年間継続的にやっているものの、なかなか終わらない。それも面白い部分でした。

質問に戻ると、こういう型式学を元にした編年は、他の遺物とは合うのか、耳飾りとか石器とか。縄文時代の年代は土器をベースにしていますが、別のものを中心に見ると、これがそのまま検証を通り抜けるものなのですか。

大塚 一番いい例は、住居址の研究と全然合いません。住居址を精密に発掘したら、一型式の土器が複雑な接合関係を示している。**新地平**という人たちの批判というのは、

私が適当にあの土器は何式、あれは何式 アートルが会の開始に先立って挨拶した時に紹介したエピソード。英語圏からの日本考古学への批判の二番目、「もっぱら土器編年研究をもとにした文化史研究を主にしている」とされる「いびつな縄文時代研究者像」を筆者がアートルの前で演じる時には、博物館や資料館を見学した際にキャプションを見ずに土器の型式名を言うことが多い。筆者がここでいう土器型式の「カタログ」を忘れない

ためという目的もあるが、正答率は高くない。

麻雀でいう盲牌 指で触っただけで麻雀牌の種類を当てること。場合によっては相手にどのような牌が渡ったかがわかることもあり、自分の一つ前のプレイヤーが捨て牌をする前に頻繁に先ヅモをして盲牌をするのはマナー違反と咎められることが多い。

住居址研究から見た時に、土器型式って一体なんなんだろう、ということです。

だから、わかって欲しいのは、そもそもこの編年表が土器から何かを考えるのではなくて、土器を通じて自分のメッセージを伝える研究なのです。それなのに、山内清男という人を神格化しすぎていて、おかしいと思います。非常に良くない状態にきています。山のように土器があって、中期は形が復元できる土器がたくさんある。それでも新しいとか古いとか、なんとか地方から来た土器とか、それ以上の議論はできていない。あれを見ると、いろんなことが言えます。つまりあれらの中期の土器とそのほかの土器とでは、特に製作体系は全然違うと思います。私自身は後期初頭の中津式というのは、関東で発生したという立場です。中津式のアイデアを持った人が関東にやって来て、土器の作り手で暇な人がいっぱいいる関東で、なぜなら人口が減ってくるから、人口が減ってくれば土器を供給する相手も減るから、暇な土器の作り手がいて、その暇な作り手に「こういう土器作ったら」と言って、作られたのが中津式という風に考えている。常に、こういう風に、並行型式が異所的に行儀よく並んでいるというのも妄想です。

小林 でも今、縄文土器研究は世界的にも一番細かくやっていて、羽生さんの同級生の小林謙一さんたちは山内の編年表をさらに細分して、それと竪穴住居の形成過程を擦り合わせて、いろんな復元をしています。だから、これに基づいた成果も出ていますと言えませんか。

大塚 だから危険とも言えます。まず、形成過程と対応するという前提はわからないです。その検討は細かく積み重ねるしかないし、それと同時に彼らがやっているあの幅でも実は大雑把かもしれない。加えて、人間の行為はどうなっているのかわからない。

小林 小林謙一さんは、あの細かい区分幅でもまだ大雑把だと言っています。竪穴の廃棄プロセスの方がずっと細かい、と。

新地平という人たち 「新地平」は「縄文研究新地平」と自称していた研究グループの略。後出の小林謙一氏が代表的な研究者とされる。関東南西部の縄文中期集落調査において出土資料のドット（三次元位置情報）を全点とるという手法や、住居のライフサイクル論、縄文中期土器を40近くに細別する編年の徹底など、調査手法から縄文集落の理解に至るまで、多くの影響を与えた。特に縄文中期の関東地方に特徴的な、住居が環状配置を呈する環状集落は結果として環状と観察されるだけで、ある一時期に環状であることはなかった

ことを上記の調査手法をもとに提唱し、縄文集落論を活発化した。

後期初頭の中津式 ここでの中津式に関する発言は2016年7月に開催された東海縄文研究会の発表要旨集に収録された「開催挨拶・趣旨説明に変えて：中津式イベントという問題提起」をもとにしている。縄文後期初頭に関西地方で中津式、関東地方で称名寺式という土器型式が設定されており、両者は似た文様を有している。その背景をどう理解するのかの論争には長い歴史がある。

大塚 あの豎穴にずっと人びとが暮らしていたのか、という大きな問題もあります。そう考えると非常に危ういです。こういうことを一つの規範として、1945 年以降に受け入れてきたことの怖さも非常に大きいです。なぜなら、1937 年という時代に何があったのかを全然考えずに、山内の編年表を実証的研究だというのは、これはやはりよくないと思います。だから、1945 年以降何をしたらいいかもあまり出てこなくて、その時に発言の自由があったのは戦争協力していない人ですから。その最たる人が山内先生です。だからみんな山内先生に対して、**報告書で謝っている**。戦争中、彼を色々無視したけれどすいませんとか。なぜ無視したのか書けばいいのに、表面的に謝っているだけで、結果的にそれが山内先生の神格化に向かっていくわけです。

芹沢長介先生はかなり真面目に山内清男先生と付き合って、ギリギリまで色々反対意見を出そうとして、ちゃんとやっています。私が芹沢先生を尊敬するのはそういうところですか。かなり山内先生に罵られたらしいです。でもとにかく頑張って、自分が福井洞穴という重要な遺跡を掘っているから、その責任感があって、福井洞穴の結果はどうしても山内先生の言うとおりにならない、だからギリギリまでぶつかったそうです。芹沢先生の大事な仕事の一つは、ドングリと土器が関係しているのではないかという指摘（芹沢 1962）で、あれは非常に重要だと思います。ところが、学史を振り返ると意外にそれに触れる人が少ない。一部の人たちは、小林達雄さんが考えついたようなことを言っていますが、オリジナルは芹沢先生です。日本のジャーナルはオリジナリティとかプライオリティとかきちんとしてないので、その問題も大きい。土器研究を何式から覚えなないといけないうのは、ひどくやる気をなくさせるし、それは土器研究の展望を損ないます。やはり形があるものは、形を理解しないといけません。

吉田 今日の大塚先生の話のテーマの一つは、山内の 1937 年の表（Fig. 6.2.2）をどう見るかですが、山内清男は私が追悼論集から拾って紹介したエピソードのように、1945 年以前は警察当局に目をつけられていた人で、アカデミアの中では主流ではないので、植民地の情報もよく知らなかったはずですか。そうすると、この図というのは、結果的にこうなってしまったのか、それとも大塚先生の言うとおりの、明確な意図があって、この範囲に収めているのか。そのどちらかを裏付けるような山内自身、あるいは周りの人の発言などはあるのですか。

大塚 ヒントはこのバツ印（×）です。この（×）は九州とかに多いです。

報告書で謝っている 戦後間もない頃の愛知県古胡貝塚の発掘調査報告書中の後藤守一氏執筆部分に「自分は固より縄文式文化研究では門外者であったにも拘わらず、嘗ては座談会とか又は他の

機会に盲目蛇におじずに山内君の諸説に異議を申し立てたこともあり、今日では汗顔に堪えない次第と思っている」（文化庁 編 1952:158）という一文がある。

吉田 (×) は型式名ではなく、地方の特定の型式と関係する、となっています。

大塚 (×) は今風に言うと異型式土器を出す遺跡です。そうすると、早期の異型式土器が九州で出る。東北の異型式土器が北海道にあるとか、こういう範囲をきちんと特定しています。彼が意図的だというのは、異型式土器をきっちり押さえて、それによって範囲を特定している。土器が行くと言うことは来てもいいわけだから、この範囲はオープンなシステムを持っていて、その外にはそのシステムはないとして、孤立的変遷と常に彼は言います。孤立的変遷というのはこの中では安定して、縦横に関係性があるけど、この外にはそうした関係性がないと言っていることになる。だから、これが彼が意図的に作ったという証拠です。文章だけでは、どうしてこれで孤立的変遷かは、よくわかりません。でも一所懸命、孤立的変遷と繰り返している。それで芹沢先生のように、さらに古いものは九州に多いから東アジアから土器がやってくると言ったら山内先生が怒り出して、「けしからん、放射性炭素年代測定法は変なこと言っている」となってしまったのです。東日本は遺跡数が多くて、西日本は遺跡数が少ない、だからより遺跡の多い東日本が中心で、そのさらに北から来た、というのが山内さんの考えです。だから、1930年代にこの表を作っている時に「北方」ということを盛んに言い出します。南というのは稲をもたらすということだから、それと対比させています。私はこの表がかなり意図的だというのは、山内先生の言説を全部チェックするとよくわかって、この表を念頭において常に説明しています。

吉田 この表の読み方としては矢印がついていないのは、関東と東北に集中していて、そこを中心に型式学的な連鎖を追っていくのですが、北海道から九州までのネットワークを前もって想定してこの範囲に収めている、ということが(×)の付け方がわかる、ということですか。

大塚 もう一つのヒントは、モースが大森貝塚の報告書で、縄文土器と彼が名付けたものは九州から北海道まで、一様に分布する、と記述していて、それに対して山内先生は反応して、それをきちんと証明してやろう、となったらしい。それを追っていく過程は実証的ですが、その範囲が「日本列島」になっているところは非常に意図的に作っているのではないかと。縄文土器が出るところには、縄文土器しか出ないので、縄文晩期と同時期に弥生土器が出るはずがないという考えも示しています。1930年の著名な論文「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」に掲載された吉胡貝塚の資料はなぜか南山大学にあります、とにかくここにも東北の亀ヶ岡式土器が出てくる。つまり大きく言うと、縄文土器同士の交流を想定している表です。

いずれにしても、この表を素直に実証的と信じたのは戦後です。山内先生にとっては意図的で、意図的なのをそれなりに分かっていたのは芹沢先生だから、長期・短期編年で意見が異なった時に本格的にぶつかってしまった。なぜかと言うと、縄文土器

が古くなった時に、こういう型的に連鎖している関係が古くからあったとなると、環境変化を超えてこういうことが起こりうるという話になってしまう。そうすると山内の「一定環境での土器文化」という前提が成り立たない。私は芹沢先生に「どこまでぶつかったんですか」とお伺いしたことがあって、「完全にぶつかったね」ということでした。完全にぶつかったんだけど、山内先生は福井洞穴の土器がどうしても見たくて、その時にはちゃんと芹沢先生に頼んだらしく、芹沢先生は東大の理学部にも土器を持って行っている。そういう交流がありつつも本格的にぶつかった芹沢先生と山内先生お二人の言っていることを慎重に検討した方がいい。そうすると、芹沢先生は早い段階から環境適応の問題と土器の変化と言っていて、山内先生は「一定の環境状態での適応」で縄文土器は存続したと言う。芹沢先生は環境変化の中での適応で縄文土器の多様性が出てくるという考え方、そこをどう評価するかです。ところが、芹沢先生は旧石器研究の方向へどんどん行ってしまった。みなさんご存知のように、前期旧石器の探求であるとか、使用痕研究の方へ行ってしまった。本当はもうちょっと詰めてくれれば、論争の行方も変わったかもしれない。

吉田 私としてはこの表の見方がかなり深まって、良かったですが、会場の皆さんの方で何かありますか。土器研究者かもしくは鍋研究者に聞いてみたいところですが。

小林 大変興味深い話をありがとうございました。一番興味深かったのは、日本列島の南の縁の大塚先生がJゾーンとしている照葉樹林帯があって、そこで隆線文土器が分布することです。ただし、一番古い年代測定値が出ているのは青森の大平山元遺跡であることが気になります。東北北部にもいろんな土器型式があるので、先ほどの大塚先生の話だと土器の日本島での自生説になるとと思いますが、自生説とは別問題にすべきではないかと思いました。というのは、縄文土器の一系統説とも関係するのですが、それが土器型式単位になっても常に系統を求めます。僕は学生時代から縄文・弥生の土器をやっていましたが、一番違和感があったのは、縄文土器研究者はルーツをはっきりさせないと落ち着かないことです。ある文様があったらこのルーツはここで、この文様のルーツはこれだと後付けしないと説明したことにならないという考えがあって、僕はそれに非常に違和感を持っていました。というのは、情報が来たと言っても必ず取り入れるわけではないからです。「情報が来るけど受け入れない」という受け手側の選択をもうちょっと考えた方がいいという立場です。この視点から見ると、別にドングリ帯のところでドングリの調理に適した鍋が作られていて、そのルーツはもしかしたら北の方の魚を煮るのに使っていた鍋にあってもいいのでは、ということです。つまり伝播過程と、南西のゾーンで独特の隆起線文土器が使われたことは切り離れた方がいいと思いますが、いかがでしょうか。

大塚 私の見解では、「N島」の北の大平山元I遺跡の無文土器は、隆起線文土器と

は全く別の流れです。「N 島」の中央以南の隆起線文土器の最古段階が分布している範囲の、隆起線文土器より古い遡源期では、一方には口縁部に粘土を点々と貼り付けるだけの土器があって、もう一方には文様を口縁部に集中させる土器があって、それら本来由来が異なる土器が交流することでよく似た一帯型の隆起線文土器になる。しかし、土器扱いは違い、一方は逆位の土器扱いで、乾燥が進行してから隆起線文をつける。もう一方は正位の土器扱いで、乾燥が進行しない時に隆起線文をつけるので、一見一帯型で似ているが、土器作りの伝統は実は異なる。つまり、遡源期には、「N 島」の北に無文土器があり、「N 島」の中央あたりに文様を口縁部に集中させる土器があり、「N 島」の南に口縁部に粘土を点々と貼り付けるだけの土器があり、そのうちの南の土器と中央の土器から隆起線文土器が出来上がり、そして、「J ゾーン」の開発を通じて、隆起線文土器は発達する、そういう風に考えています。

小林 ただ鍋の使用自体は大陸から伝わって来て、日本列島に広がっても、差し支えないのでは。つまり、別に自生説でなくてもいいのでは。

大塚 この範囲で自生したとは言っていないです。異なる土器型式がだんだん似てくるという話しかしていないですから、この地図の範囲に多元的に存在していて、それ以上遡ったところはわからない、ということです。つまり、縄文土器起源論の最大の問題は、ある土器が見つかったら他に類例がないから最古という人がいますが、「最古」の土器を作った人は昨日も作っているかもしれないので、「最古」は最古ではありません。ある時から突然違う言語を喋り出すわけではないのと同じです。構造主義的な見方です。根本が見つかったと思ってもそれは最古じゃなくて、それは常に作られている時のものが見つかったはずなので、技術は安定しないと土器は作れない。それはいつからあったか、それはわからない。だから多元的な様相が見えたとして、その先はどうかわからない。もっとあるかもしれない。そういうロジックをちゃんと考えずに、「最古の土器を探しましょう」というのを真に受けて、福井洞穴を掘って、芹沢先生は大変な目に遭ってしまったのです。

私が言いたいのは、偉い先生に乗っからずに、よく考えた方がいいですよ、ということです。特に若い人たちは。まして今だと、科研費を取りなさいとか、業績は何本とか、ああいうくだらない中で生きているのは、よくないです。やりたいことをやった方がいい。土器はものすごい量出ますから、そこからわかることはたくさんあるはずですよ。わかることを追求していく中で、自分の研究はこうだと言う人しか、残っていません。毎年日本考古学協会の年報で、何月に何があったとか、その次の月はこれですとか、羅列しただけになっていますけど、このままではそういう状態になるだけかと思います。先ほどの質問の根本的な問題は土器がここで最古かどうかというのは、トートロジカルな議論になるだけです。その場合でもこの土器が使われた時の環境と人々がどのようにわかるか、それは大事なことです。その際に、多くの人は土

器を作った社会の人たちは一方で狩猟や採集をやっているというけれど、土器を作るのはよく考えるとなかなか大変なことです。だから、そう簡単に土器を作っている人が他のことも色々やっているとは思えないし、作っている人は作っている人で特別な立場の人と思わないと、無理ではないかと考えています。

小林 ただ大塚さんの先ほどの話し方だと、大陸から土器が伝わって来たという見方に批判的なのかなと思いました。

大塚 データがないのに来たとは言えないです。年代論的に全く飛び越えた古い値が大陸側で出ていればいいですが、そういう年代が出ていないのに来たという議論をするのはおかしい。それは日本列島には物事がすべからく入って来るという古めかしい議論です。この場合の古めかしい議論は、岡本東三さんがよく言います。日本というのは仏教も来たし、他の文物も来たし、そういう国なんだと、だから土器も外から入って来るんだという、どうしてそんな風な考えになるのか。そういう議論に対して私は、実証的ではないと言いたい。大陸側ではるかに古い土器が出てくればいいです。でも、日本で出てくる土器はほとんど紐づくりです。粘土紐を下から上に積み上げる。中国の古い土器はタタキ技法で作るものです。そういうものから列島の土器につながる可能性はないです。では北の方で古いデータがあるかというたないです。同時に生態系が違います。その中でどういう風に伝わって来るのか、と色々考えると、まずはお示ししたような地理空間があるというのを理解した方がいいです。

旧石器の研究者はなぜかこの状態で「古本州島」と言って議論しますが、その時に面白いのは、ある段階の九州にでてくる石器と朝鮮半島の石器に対して、固有の何かと他所という区分を作りたがります。よく考えると今の九州と朝鮮半島も含めて広い範囲で気候条件が似ていると思うので、石器も似ているのは当たり前のことだと思いますが、あたかも今の対馬海峡のあたりに国境線があるかのようなことを言ったりする。東京大学出版会が出した『図解日本の人類遺跡』（日本第四紀学会・小野他編1992）は、ポツダム宣言以降の領域を枠内に図示していて、そもそも政治的です。それから自由になるためには、色々分布の読み解きが必要です。両者は全く違う森林帯で、それぞれに土器がある。それらの土器の分布の背景は違うものとした方がいい。背景の理解の仕方は、可能性としては色々追求した方がいいです。だけど、北から土器が来たに違いないという議論は根拠が乏しい。それよりは形からはじめて、地理的な分布状況を古生態との関係で考える、その方が生産的です。こういう風に見たらどうかという時に、まず古環境に着目する。だけど多くの方はそれに日本列島を投影してしまう。北海道を入れて議論して、北海道はまだ土器がないという言い方、それは日本列島というのを想定しているから、北海道には土器がないとか、草創期はないとかいう言い方は余計なお世話です。レジュメに書いた「想像された日本列島」というのはベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』をもじって名付けました。どこ

までこの状況は続くのでしょうか。

河村 好光（以下、「河村」） 小林さんの指摘も面白かったのですが、要するに、縄文土器について、青森でとても古いデータが出ていて、大塚先生の話によると太平洋側にも古い土器がある。両者は気候条件も植生も違う。それから考えると、そもそも文化として違っていたのではないかと。それが山内さんの言うように一つの土器群になっていくというのは、今後研究が進んでいくと、二つなり三つなり四つなりが一つのものになっていくという流れは復元されるだろうとお考えですか。

大塚 私はそうは思っていないです。東は東、西は西で、それぞれにきちんとしたルールの中で、どんどん違う世界を作っていると思っています。だから、この後の爪形文とか多縄文の出方は異様にバラバラです。そういう風に系統性を持つという議論は良くないと思います。前後関係と連絡具合という議論はいいですが、系統性という考え方は非常に危険です。私は縄文土器一系統説にはそもそも反対の立場です。なぜなら、キメラ現象が各地で起きます。

河村 私は縄文を主に研究しているわけではないので、何かわかりやすいモデルを作っていただけるとありがたい。山内さんの表は意図したものではない可能性もあるけれども、皆さんが、ほとんど全ての縄文の研究者がこれに依拠してしまっているわけですね。つまり今日の話を私なりに理解すると、縄文時代には日本はなかった、と。

大塚 日本はなかったというよりは、縄文時代に縄文土器はなかった。縄文時代というのは構わないです。年代幅がここからここですという理解のためには必要です。ただしその中に縄文土器というまとまりはない。

河村 そういうナショナルなものもなかったということから、出発しなきゃいけない、ということですね。僕ら弥生・古墳研究者は国家の形成過程を主要なテーマにしていますが、縄文にまでそれを遡らせないというのは全くそのとおりだな、と思って聞いていました。そういうことをモデルとして提示していただけるとかなり研究も進むな、と思いました。

大塚 それは痛切に感じていることですが、多くの人は、先ほど言った「ハイパー縄文文化」を次々に書いています。

河村 その中で日本地図があっても、今の日本はこうだけど、実は当時はこうなんですよ、というのを強調したい意図で地図を作っている人もいるだろうし、そこは図表

キメラ現象 49 頁の「キマイラ的様相」の註参照。

化する場合に避けられない問題です。春成さんも気候条件云々を無視するような縄文文化を設定してしまっていますが、春成さんもその段階では、ご自身も予想していなかった結果が出た時にとても苦慮して、自問自答しながら作っているということもあると思うので、どちらにしても自分が伝えたいことは率直な形で伝えていく積み重ねが大事な、と思いました。

大塚 それはおっしゃるとおりです。

吉田 大塚先生は、まずはこの図によって土器の自生説を論じたわけではない、ということで、その問題は別であるということです。河村先生の発言の中で、どうしても分布図を作ってしまうと、あるいは大塚先生が言われたように旧石器研究でも「古本州島」と名付けてしまうと、今の日本を重ね合わせるような考え方を再生産してしまう。そうすると、考古学における地図はどうあるべきか、という問題にもなると思います。地図を作るということはそもそも政治的な行為で、地図にどうしても含まれてしまう政治性はどう付き合うのか、という問いが今の河村先生の発言で非常に重要な点かと思います。

小林 河村さんが言われたことには全く同感です。より具体的に言うと、大塚さんが言われるように、少なくとも大陸と北海道が繋がっていた時代は縄文土器としてくるのは不適切だと思います。ただし、大陸から切れた後の土器を見ると、韓半島の無文土器と日本列島の東西で違いがありますが、縄文土器と言われている土器、特に早期から晩期の土器を見ると、大陸や韓半島の土器は尖った底が続くとか、やたら大きいとか、やはり固有のまとまりがあると思います。今まで復元できる土器があまり出ておらず、使い方がほとんど研究されていないのでよく見えていませんが、早期から晩期では大陸とは違った日本列島固有の縄文土器の特徴が抽出できると思います。

大塚 私は日本列島固有と言う時に、一つになっていないというのが固有性だと思います。そういう意味で大きい土器圏とか小さい土器圏、拡大縮小が常にあっても、その範囲は割と固定的に見えます。だから、西は西、東は東と思っているのです。

小林 ただ、その大陸の土器のまとめ方にも色々あって、大陸にも日本列島の中にも色々あります。大きく見ると、韓半島ではある時期まで尖った底が続く一方で、日本列島では平底でも円筒土器みたいに大きいものもあれば小型のものもあって、浅鉢もいっぱい出てきます。よって、いろんな要素を見ていくと、日本の環境に合わせた使い方の土器群が抽出できる可能性があります。日本列島の環境に合わせた、島国として大陸から離れた独自の環境を持っていて、それに合わせた土器の形作りがあってもいいと思います。文様では厳しいかもしれませんが。

大塚 それを縄文土器と呼ぶことの整合性は別として、ということですか。

小林 縄文土器と言ってもいいと思います。

大塚 その時の広がりがどうかというと、割と私には小さく見えます。それは常に全体として一つだった試しはないと思っています。

小林 そういう見方をしてないだけかもしれないです。

大塚 そういう見方の人が大半の中で、小さいまとまりがたくさん見える、その小さい単位というのは土器型式の表とは関係ない、飛び越えた関係が出てくるので、この表で言う複数の型式が複合して型式の場合と、単純に一型式として理解できる場合と、別れてくると思います。それをもう少しきちんとやっていかないと、今の議論は難しいです。私が**榎原式文様**にこだわるのは、精製の鉢ないしは浅鉢の榎原式文様土器はちょうど亀ケ岡式や安行式がない西日本に広がる。西日本以外は、榎原式文様はいろいろな器物に施され、東北以北には櫛の透かし文様で広がる、関東・東北では土器の文様として広がる、石剣・石棒の文様で広がるなどです。あるいは、深鉢だけに取り入れられた、とか。そう言う風に見ると、日本列島内で違う世界がある程度対峙しながら大陸とも違う、そういう風に描けると考えています。

小林 土器文様を見るとそうかもしれないです。しかし、例えば、縄文前期では**繊維土器**と括れる、広範囲にわたる共通性があります。円筒土器は、大きく、かつ細長い土器を作る必要性から一気に粘土紐を積み上げるので、かた崩れしないように繊維を混ぜる工夫をしています。東北の北のほうは繊維が多くて、南の方は少なくなります。そういう共通性は探していけば、日本列島独自の特徴が出てくるのではないかな。中期には全国的に土器が分厚くなる現象も大陸と切り離された結果なのでは。

大塚 基本的には大陸と切り離して考えるのが正しいと思いますよ。

榎原式文様 奈良県榎原遺跡出土土器を標識とする文様の名称。榎原式文様は縄文時代末の所産で、弥生時代の際初期の土器群である遠賀川式土器の木葉文の元となったとされていたが、縄文後期末から晩期初頭の時期の物であるとして編年的位置を変更するとともに、その時期の広域編年上、重要であることを示した（大塚 1995）。その広域の範囲を「《縄紋文化圏》をイーミックな広がりとして厳密に考究するときにきわめて有為な指標

空間」（同：132）ともしている。

繊維土器 土器の胎土中に植物繊維が混入されている土器。土器の焼成時に混入されていたであろう繊維は燃焼して消失するため、その部分は空洞になる。そうした空洞が観察される土器を称して繊維土器と言う。小林氏の言うように、縄文早期後半から前期前半においては、列島の広い範囲で繊維土器が確認される。

小林 比較をして見ると違いが出てくるかもしれない。

大塚 あの範囲の中で、様々なドラマが起こっているように私には見えます。それはなぜかという、より小さい島々になって、四方八方に海が出てきて、いろんな資源が短距離で手に入る状況になった時の土器文化は、非常に多様性を帯びてくる。

小林 多様ですが、前期では繊維を入れる。なぜ入れるかという円筒形の鍋を一気に作る必要性から。共通性も探せば出てくるのでは。

大塚 その共通性をどう見るかですね。

小林 機能的な見方をしていないから、環境との関係が見えてこないのでは。

大塚 生活にとっての機能ですから、似たような生活をすれば似てくると思うので、それとデザインが違うのをどう見るかだと思います。

小林 お互いに関わりがあってもいいと思う。例えば縄文鍋と弥生鍋は違いがあり、古墳前期の鍋も弥生時代とは違っています。それは調理の仕方が違うからです。同じような違いが日本列島と大陸の間にあっても不思議ではないと思う。

大塚 日本列島と大陸はかなり違うと私も思っています。

小林 日本列島の中でも色々だけど、日本列島を含めた共通性も見つけられるかもしれない。縄文土器を否定するのはまだ早いのでは。

大塚 この場合の縄文土器は、縄文土器一系統説に基づいた縄文土器ですから。それはまずいと言っています。

小林 じゃあ縄文土器という言い方自体は良い訳ですか。

大塚 いやそうではなくて、縄文土器一系統説をまずはどうやって払拭するかとなった時に、きちんと理解した方がいいのは、例えば、黒人、白人、黄色人種といった時に、ちゃんと本質主義みたいなものを払拭できた上で人種主義ではなくて白人と呼ぶのか、そういう問題と絡むので、縄文土器一系統説がある限り、縄文土器という幻想は常に出てくる。それをどうするかを考えたときには、もとの山内の研究が単純に実証的な研究ではないことを理解した方がいいということです。私が言いたかった戦後日本考古学が何をしたかというのは、そういう山内先生を実証的研究者に仕立て上げ

て、次に自分たちがやることは山のような資料をもとに社会を理解することだというストーリーを作ったわけで、その中心人物の一人である近藤義郎先生は、非常に問題だな、と私は思っています。

小林 そこはよく理解できましたが、河村さんが指摘されたように、現実には記述をしないといけません。例えば縄文土器という呼び方を否定してしまうと、記述が非常にやりにくくなってしまいます。さらに、先ほど述べたように、日本列島の土器は多様だけど、多様性を包括する共通性を見つけようとする研究をやっていない。大陸との比較をやっていない。だから、縄文土器という列島固有のものがあるかどうかを、否定するか肯定するかはまだちょっと早いのではないかな。

大塚 だから私は否定しているのではなくて、ロジカルにきちんと物事の理解を進めなかった日本考古学の責任を問うているわけです。

小林 それは理解できます。

大塚 だからその時に、この山内の表の範囲に固有な色々な土器群が出てくると思っている。

小林 それが大陸と違う明らかな共通性があつたら、ひとくくりにできるのではないですか。それは十分ありうると思いますが。

大塚 私はありうるとは思ってない。つまり、そうやって過去に自分たちと同じような日本人というのが立ち上がるよりは、いろんな人がいた、そういう議論も考えた方がいいということです。

小林 いろんな人がいてもいいのですが、日本列島という大陸と切り離された時の環境に適した土器の作りとか、特徴が出てきても不思議じゃないと思います。それがずっと続くかどうかは別ですが。

吉田 今のやり取りは、私が最初に掲げたスピーカーへの批判と、今後どうするか議論に関わっていると思います。小林先生の話で思い出したのは水ノ江和同さんが、縄文中・後期の対馬海峡を挟んだ土器の問題（2003、2007）を取り扱ったことがあって、九州島で韓半島系の土器、韓半島で九州の縄文中・後期の土器とよく似たものが出てきますが、よく見ると文様の付け方とか、元の地域のルールと外れた土器ばかり作っている・・・

小林 それは中園聡さんではないですか？

吉田 中園さんもやっているかもしれないですが、いろんな人がこの海峡を挟んだ問題には取り組んでいて、それによって言葉が通じなかったに違いない、と言っている研究もあるぐらいです。私はこうした研究例をはじめとして、土器というもので、山内型式学に則った編年研究以外にどういことを今は語っているかに興味がある。土器研究は小林先生がおっしゃったようにどうしてもルーツの議論になってしまうのに対して、どういう関心で現在土器が研究されているのかな、というのを、今日わざわざ青森から来ていただいた若き土器研究者の小泉さんに聞いてみたいのですが、どうですか。

小泉さんは、今は弘前大学にいまして、今日は遠くから来ていただいたので、そのついでにもう少し頑張ってもらおうということです。休憩時間に大塚先生から 1980 年代はシンポジウムの時代というお話がありましたが、私が学生だった 90 年代の終わり頃はまだそのシンポジウム時代は続いていて、それらの主に土器編年研究のシンポジウムには喧々諤々議論することを厭わない、どう猛な人たちが集っていて怖い世界だった。そこにわざわざ今飛び込んで、何をやろうとしているのかな、というのを聞いてみたい。それと、今日の話聞いてどう思ったのかを聞きたいのですが。

小泉 翔太（弘前大学。以下、「小泉」） 今の質問の背景は、なぜ今さら土器をやるのか、というのがあると思います。

吉田 というのもありますし、ジョンさんが提起した「なぜみんなそもそも土器が好きなのか」というのもあります。

小泉 土器が基本になるというのは、考古学をやる上でまず教わることです。土器がわからないと何もわからない、と表現されます。まさにカタログに合わせないと、年代もわからないし、地域すらもわからない。そういう技術者の意味での考古学をやる上でのメリットがある。一方で、機能の話に関しては、小林先生、大塚先生から出しましたが、そうした土器を文化の産物としてみるという視点はやはり欠けていると思います。それはなぜかというと山内型式論に依拠した編年を中心とした土器研究を積み上げて来たから。それはそれでおそらく理由があって、圧倒的な数量の発掘調査が実施されるなかにあっては、まさに技術者としての考古学を積み重ねていくことが先決であったために、それがメインストリームになってきたと思いますが、ではその土器を使った人はどういう生活をしていて、土器をどういう表象として用いていたのか、あるいは実際の機能としてどういう違いがあったのか、そうした縄文土器に現れる多様性の意味を深く追求できていないところが課題として残されていると考えています。そういうところに山内型式論に依拠した縄文土器研究の功罪が垣間見えて来て

いるのが現状かな、と思いますが、そういう現状では、逆にニッチとして土器研究をしているという意識もあります。おっしゃったようにシンポジウムで喧々譁々とやっていた世代から僕はすこし離れているので、焼け野原の中を僕らは歩いて行こうとしています。

（「焼け野原」という表現に一同笑いと感嘆）

吉田 その焼け野原を歩く時に今日の話題は参考になりそうですか。

小泉 非常に面白かったです。一番ショッキングだったのは、山内清男の実証主義と言われた編年表が多分に思想的な背景を持ったものだったという大塚先生のお話です。それと、追悼論集で紹介されていた山内自身の発言の中で、一番印象に残ったのは「自分は Catalog Maker でしかない」という発言です。土器とそのほかの遺物の編年が合うのか、という質問がありましたが、僕の理解としては、ああいう表を作って山内清男が強調したのは、まず土器の編年をしてから、ほかの遺物を対応させるというやり方をして、そもそも土器中心の編年なので、合わないというロジックは成り立たないと思います。そういう意味で、山内清男がやりたかったことは、あの編年表を作ることではなくて、あれがスタートで、そこからどう話を展開するかだったと理解していたので、Catalog Maker という言い方は非常にしっくり来たのですが、逆にあの編年表が実証主義的なものではなくて、一定の思想が絡んでいるとなると、ちょっと評価が変わってくるのかな、と思っています。

大塚 山内先生の対談などをよく読むと、ちゃんと社会の階層化とか、そういうものに言及しています。縄文晩期の大洞式がなぜ広がったのか、あれを評価する共通の認識体系が日本列島にあって大洞式が評価されて、受け入れ主体はどういう社会だったのかという指摘は、階層化の問題と絡みます。環境が悪化した時にああいう階層化された中心が出てきて、その周りはどうなんだろうと、次に行こうとした時に、草創期問題で土器の出現が環境悪化以前になるかもしれない、となった時に、山内先生は次に展開できなくなりました。

そういう展開ができなかったのを横で見ていた渡辺仁先生が、縄文式階層化社会と言い出したのです。そういう経緯がわかってないと、なぜ渡辺仁先生が突然ああいうことを言い出したのかがわからない。あの本（渡辺 1990）の第Ⅰ部の「Ⅰ 問題設定」

山内先生の対談 例えば平山久夫氏などが聞き手となった対談（山内・他 1971）がある。セミナーシリーズ第 6 回のチラシの中にある「関東の安行の普通の土器は女でしょう」（同：74）、「亀ヶ岡式ってのは男が作った」（同：74）はこの対談

中の山内清男の発言から抜き出したものである。その他、「老人になると仕事が無くなっちゃいますからね。老人なんかが関係してるんだと」（同：74）という発言もあり、渡辺仁氏が階層化の要因の一つとした退役狩猟者層の発想に近い。

には、私に関わるはずだったものと関連した内容が反映されていますが、私は部分的にしか関われなくて、先生は、先に土偶の話を書かれて、亡くなってしまいました。先生から示唆を受けて問題視したのは、例えば「ハイパートロフィー」現象です。土器で煮炊きということとは別に、土器を作ること自体がすごいのだという「ハイパートロフィー」現象というのがあって、その「ハイパートロフィー」とは何かを書く予定でした。そのためにネイティブアメリカンのデータとかを集めた段階で、先生はもう一方の関心事であった土偶に行ってしまったのです。それで私の方は、「ハイパートロフィー」を念頭において、いくつか安行式土器で文章を書いています。要するに、安行式土器の作り手が、「ハイパートロフィー」的に精製土器を作って楽しんでいる、という議論を一回した方がいいだろうと思ったのです。そうじゃないと、なぜあんなことをするのかかわからない。「ハイパートロフィー」的な精製土器はすごく不合理です、煮炊きということを考えたら。それでもあんな風を作る、その時の「ハイパートロフィー」として何がもとで大きくなったのかを、私としては実証しようとしているのですが、なかなか難しい。

それで関東後期土器の研究論集、かつて一緒に共同研究した新屋雅明君の論集のことですが、あの中に新屋君の加曽利 B 式の研究はよくできている、でも彼の安行式研究について、私は賛同できないと「解題」（2015）で言ったのは、「ハイパートロフィー」現象と関係します。安行式研究では、彼は土器を常にある組み合わせの単位としてしか見ていない。安行式は大きく作ったり、小さく作ったり、拡大縮小することに意味があるということを、渡辺先生から示唆を受けて、詰めていたのです。それで去年、早稲田大学で話をした時にはどうやって渡辺先生と組んでやっていたのかを説明しました。東海縄文研究会でも、富井眞君が発表者として来てくれた頃から、渡辺仁先生と関わって何をやっていたのかを教えました。少し話が横道にそれたかもしれませんが、階層化社会というのは、山内清男がやれなかったことを横で見ていた渡辺仁先生が受け継いだことです。佐藤達夫先生は山内先生と一緒に研究しましたが、また異なる方向から、草創期研究をやり直して彼独自の論文を書いたという流れがあります。芹沢先生はその流れとは別に、山内先生にすごく親和的な発想の中で真面目にぶつかってしまった。だけど学界全体が山内先生の奇怪な行動のおかげで、彼の研究が実証的な研究にとどまるのではなく、イデオロギーの産物だという面が見えてこなかった。1952 年に出版された吉胡貝塚の発掘調査報告書には、後藤守一さんが代表

先に土偶の話を書かれて 渡辺仁氏は国立民族学博物館研究報告に「縄文土偶と女神信仰：民族誌的情報の考古学への体系的援用に関する研究」という報告を 3 回に渡って掲載し（1998～1999 年）、『縄文土偶と女神信仰』（2001）として刊行された。

早稲田大学で話をした時 2015 年 10 月 31 日の早稲田大学総合人文科学研究センター研究部門「社会の複雑化・階層化の史的パースペクティブ」主催講演会「“縄文式階層化社会”の意義を考える：縄文文化の脱構築のために」

して、戦争中の山内先生に対する態度を謝っている不思議な文章が入っています。しかし、そういう経緯を調べて書かないままに学史が進行して、一方で近藤先生たちは自分たちがやっていることをすごく大きく見せたいがためかわかりませんが、戦争中にやったことをすごく小さく見積もった評価を作り上げてしまった。それを受けて坂詰秀一先生が書いている『太平洋戦争と考古学』（1997）というのも、すごく小さい話に終始してしまっている。

そういうわけで、今は「焼け野原」ではないですよ。今や土器研究者は少なくなって来ているし、少ない時にやるといいのではないですか。土器研究について、関西に行った時に思ったのは、関西は弥生土器を大事にするけど、縄文土器はどうでもいいから、ほっておかれて二、三日でも平気で見ることができた。そのおかげで山のように写真が撮れて非常に参考になりました。扱いがぞんざいな分、家根祥多さんなどは好きなようにできたのです。決して焼け野原ではなくて、今が一番生産的な議論が出せる時期ではないですか。なぜなら、行き着くところまで行ってしまった、縄文土器一系統説は。それは考え直さないといけないし、考え直さないといけないことだけはわかった訳ですから、焼け野原ではないです。なぜなら、土器は嘘をつかないから。それらをくっつけてどうするかとか、色々やった方がいいです。今、小泉君と、寿能泥炭層遺跡で一乗寺K式土器が出ていて、それをどう考えるか研究しています。今はチャンスです。多くの人が、例えば、カゴを一所懸命やっています。それもいいかもしれません。でも所詮数年の科研費のカネが続く限りのことです。金の切れ目が緑の切れ目で、研究も衰退していくと思います。土器は常にあります、腐らないし。カゴは保存状態が悪ければ、崩壊しますから。そのように考えれば土器をやった方がいいです。最初に質問のあった「なぜ土器なのか」に対しては、土器は常にいっぱい出てくるし、今後置いといても壊れないです。カゴとか有機質のものはどんどん壊れていきます。保存状態が悪ければ見せてくれないかもしれない。土器はいくらでも見せてくれるし。

アートル 吉田さんの話から繋げていくと、今日の議論はイデオロギーと日本の考古学の関係がベースとしてあって、縄文の型式と日本の縄文というのは、継続的にある、ひとつの文化である、多面的である、という具合にいろんな仮説があって、研究している人たちと社会との関係がその違いが背景としてあることが面白いと思いました。

ところで今、2016年における土器、現代のポリティックスとかイデオロギーとかを考えると、日本の考古学の中で遺跡、遺物の利用、パブリック考古学という視点から見ると、新たな時代に変わっているような気もする。そこで面白いのは、縄文時代における多様性が実際のところどうかはわからないが、現代の縄文時代の多様な使い方、多様な理解の仕方、多様な見せ方があるという現象です。安芸さんがやっているArt & Archaeologyでも、縄文土器から何がインスパイアされているのか、現在において実際に土器はどうやって日本社会を動かしているかを、今日の話のような考古学の

歴史、日本の近代史の変遷にくわえて、現代の縄文をみるのも面白いと思いました。

吉田 そろそろまとめたいと思いますが、河村先生が一言あるそうなのでお願いします。

河村 今日は山内清男がテーマということなので、石川考古学との関係を触れておきたいと思います。石川考古学研究会というのは1948年に発足しています。なぜ長く続いてきたかというのと、**九学会の能登総合調査**が大きい。その調査に山内先生が来られて、考古好きの学校の先生方が山内先生に付いて、考古学を、土器を学んだというのが、スタートです。会ができた早い段階で縄文遺跡の発掘をしたりしながら、その後68年、続いております。地域学会としての歴史は長いわけですが、山内清男との関係でそういうこともあった、ということも触れておきたい。石川考古学研究会は現在300人ほどの会員がいて、この回の宣伝もホームページに載せて、それで今回も何人か来ています。考古学に対する思いみたいなもので繋がっていくわけですから、そこも評価しながら話を進めて行った方がいいかな、と思います。

吉田 私もジョンさんも、大塚先生が批判していたような学史の理解の仕方とは違うもの、そうではないエピソードやストーリーを拾いたいというのもこの会を開催している理由なので、そういった話はとても興味深いです。今日は小泉さんの「焼け野原」発言もとても良かったですし、小泉さんは「技術者」という表現を何回か繰り返しましたが、それが何を指すかとか、色々とはつきませんが、そろそろまとめます。

会の冒頭で私は前座ですよと言いましたが、その後にかなりインパクトのある話があって、対話の時間はほぼその話題に終始したということで、見事に前座の役割を果たしたかな、と自画自賛しています。こうしたいろんな方向に広がりを持つ、また次の世代に期待されていることがとても伝わった話を提供していただいた、名古屋から来ていただきました大塚先生に改めて拍手をして終わりたいと思います。

(一同拍手)

大塚 ちなみに、1952年生まれで、現在64歳です。ということで。

吉田 ありがとう、ございました？

九学会の能登総合調査 戦後に渋沢敬三の提唱で組織された「九学会連合」は人文科学系の九つの学会の連合で、対馬などにおける特定地域の共同調査を行っていた。能登での調査は1952年度

に行われた。山内清男は「第4班能登半島の遺跡と遺物」で「奥能登の先史遺跡の編年的研究」を担当している(坂野2012)。